

(独立行政法人教職員支援機構委嘱事業)

教員の資質向上のための研修プログラム開発支援事業

実施報告書

プログラム名	保幼小接続期教育推進のための研修プログラム開発 「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」からみた発達の連続性
プログラムの特徴	研修対象は、神戸市内の公立及び私立の幼稚園・保育園等に勤務する教員・保育士と、神戸市立小学校で主に低学年の担任をする教員である。神戸市では小学校に入学してくる児童の約8割が私立の幼稚園・保育園等の出身であるため、研修対象を公立に限定せずに私立にまで広げる点が第1の特徴である。研修内容については、神戸大学教員とベテランの学校園教員等が講師となり、アクティブラーニングを含む理論的・実践的な研修講座を開催する。その際、従来の幼稚園教育の内容(5領域)ではなく、新たに設定された10の「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を基準にして接続期教育の研修講座を企画・実施することが第2の特徴である。実施後は、インターネット上で各回の講座内容の概要を掲載するとともに、それをもとに「研修テキスト」を作成し市内の学校園に配布する。研修終了後も広く神戸市内の教員・保育士が各学校園での研修を行う際の参考となる資料を作成する点が第3の特徴である。

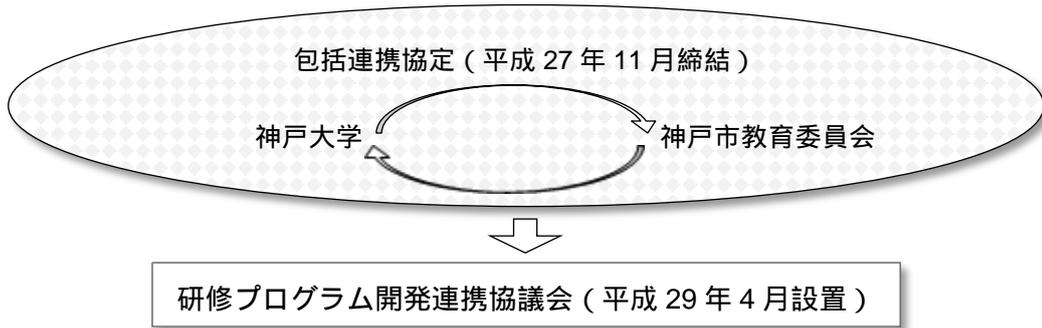
平成30年3月

機関名 国立大学法人 神戸大学

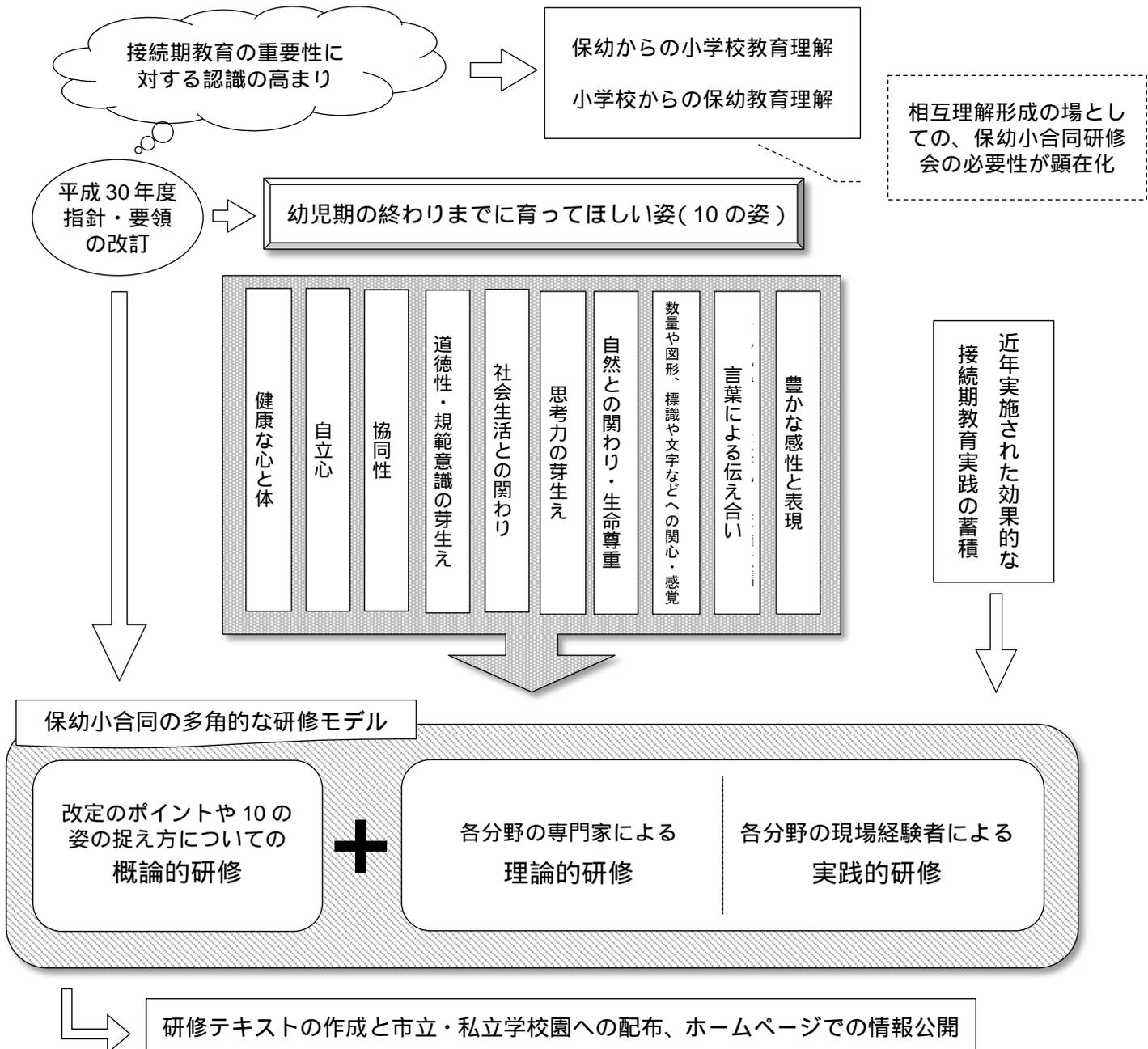
連携先 神戸市教育委員会

プログラムの全体概要

【組織図】



【研修プログラムの概要】



開発の目的・方法・組織

1 開発目的

保幼小の連携と接続期教育の充実を図ることの重要性が指摘されて久しい。平成 27 年 8 月に中央教育審議会教育課程部会より「教育課程特別部会 論点整理」が取りまとめられた。その中でも、幼児期と小学校教育の連続性を図り、特に両者の方法の違いすなわち、教科主義教育と経験主義教育の違いによる段差を、子どもの育ちと学びの姿の情報の共有や理解によりゆるやかにし、接続期教育の充実を図ること、つまり、学びの連続性が確保されることの重要性が指摘されている。

これを踏まえて、このたびの教育要領・学習指導要領の改訂では、接続期教育の充実が改訂のポイントの一つに位置づけられている。幼稚園、保育所、認定こども園、小学校、中学校、高等学校の接続については、資質・能力の 3 本の柱が示され、園校種を越えた、誕生から大人になるまでの次世代育成の一貫した教育が目指されている。

その中で、幼児期の教育と小学校の教育の連携については、幼児期の園種が、幼稚園、保育所、こども園と複数でありかつ私立園の割合が高いため、組織体制、内容理解、実際の交流から、教育の情報共有、さらには教育内容と方法の連続性にいたるまで、課題がまだまだ山積している。こうした状況は特に大都市で顕著で、神戸市にとっても焦眉の課題である。

幼児期の教育と小学校教育の連携の重要性が増すなか、小学校教員に対しては幼児教育の学びの軌跡を踏まえた教育実践を行うための資質能力の向上に役立つ研修が必要である。また、幼稚園教員等に対しては小学校教育を見据えた保育実践を行うための資質能力の向上に役立つ研修が必要である。

以上のことから、本事業では神戸大学と神戸市教育委員会の連携により、保幼小接続期教育の充実を図る研修プログラムを開発することを目的とする。

2 開発の方法

本事業は、神戸市内の公立及び私立の幼稚園・保育園等に勤務する教員・保育士と、神戸市立小学校で主に低学年の担任をする教員を対象にした研修の計画・実施・評価を通して、保幼小接続期教育推進のための研修プログラムを提案するものである。研修プログラムを開発するにあたり、3 つの方針を立てた。

第一の開発方針は、従来の幼稚園教育の内容（5 領域）ではなく、新たに設定された 10 の「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」を基準にして、接続期の子どもの発達の連続性を顧慮した研修講座を計画・実施することである。

第二の開発方針は、実践的研修と理論的研修を組み合わせることである。保幼小接続期教育についての概論的研修を踏まえて、各セミナーでは神戸大学教員とベテランの学校園教員等と一緒に講師を務め、アクティブラーニングを含む理論的・実践的な研修講座を開催する。

第三の開発方針は、研修対象を公立に限定せずに私立にまで広げることである。養成や研修の経験が異なる多様な教員・保育士をセミナーの対象にすることから、研修内容については、基礎的・基本的な知識・技能をしっかりとカバーしたうえで、発展的な内容を扱う。

各セミナーが終わるごとに、受講生による評価を行った。各回の研修講座終了時に受講者に対してアンケート調査を行い、研修講座に対して満足した点、改善すべき点などについて回答を求めた。

その際、研修講座の内容だけでなく、講義・演習等の研修方法についても質問した。また研修者自身の自己評価を行い、研修内容と方法の妥当性について自ら振り返り評価する。最後に「研修プログラム開発連携協議会」において、これら2つの評価の結果を分析しながら、本研修プログラムの全体についての評価を行い、今後の研修内容・方法の改善について検討した。

研修実施後は、インターネット上で各回の講座内容の概要を掲載するとともに、それをもとに「研修テキスト」を作成し、学校園での研修に役立ててもらえるように神戸市内の学校園に配布した。

3 開発組織

神戸市教育委員会と神戸大学とは、長年にわたる教育分野での連携・協働の実績に基づき、平成27年11月に包括連携協定を締結した。本協定では、神戸大学における教員養成とならんで、現職教員研修が連携・協働の大きな柱に位置づけられている。

今回の研修プログラム開発にあたっては、こうした連携状況の上に、神戸大学と神戸市教育委員会のスタッフにより「研修プログラム開発連携協議会」を設置した。構成員の氏名及び担当・役割等は以下の通りである。

No	所属・職名	氏名	担当・役割	備考
1	神戸市総合教育センター・首席指導主事	田原 唯志	研修の企画・評価	
2	神戸市総合教育センター・研修係長	野方 俊克	研修の企画・評価	
3	神戸市総合教育センター・指導主事	長谷川 秀治	研修の企画・評価	セミナー担当
4	神戸市総合教育センター・指導主事	古池 茂	研修の企画・評価	
5	神戸市教育委員会事務局指導課初等教育係指導主事	岩濱 里江子	研修の企画・評価	幼稚園教育担当
6	神戸大学大学院・人間発達環境学研究科・教授	稲垣 成哲	研修の企画・実施・評価 (専門：科学教育)	同研究科・教育連携推進室長
7	神戸大学大学院・人間発達環境学研究科・教授	渡邊 隆信	研修の企画・実施・評価 (専門：道德教育)	同室員
8	神戸大学大学院・人間発達環境学研究科・教授	岡部 恭幸	研修の企画・実施・評価 (専門：数学教育)	同室員
9	神戸大学大学院・人間発達環境学研究科・教授	国土 将平	研修の企画・実施・評価 (専門：保健体育科教育)	同室員
10	神戸大学大学院・人間発達環境学研究科・准教授	北野 幸子	研修の企画・実施・評価 (専門：乳幼児教育)	

11	神戸大学大学院・人間発達環境学研究科・特命講師	長谷川 諒	研修の評価 (専門：音楽教育)	
----	-------------------------	-------	--------------------	--

研修プログラム開発連携協議会は年3回開催した。1回目は年度当初の6月であり、年間スケジュールの確認と研修講座の内容・方法について協議を行った。2回目は研修講座が終了後の2月である。ここでは、各回の受講者対象のアンケート調査と研修者の自己評価の結果について意見交換を行い、「研修テキスト」の作成に役立てた。3回目は年度末の3月に開催し、本研修プログラム開発事業全体の総合評価を行うとともに、開発した研修プログラムを今後どのように活用し、また発展させていくのかについて話し合った。

開発の実際とその成果

1 要領・指針の改定のポイントに関する研修

研修のねらい

教育制度改革、カリキュラム論の観点から、このたびの改訂（改定）のポイントについて理解を深める。特にカリキュラム・マネジメントや子どもの育ちや学びの姿の共有をいかに図り、接続期教育の充実を図るかを考察する。

対象、人数、期間、会場、講師

対象：市立・私立幼稚園教員、市立・私立保育園教員、認定こども園教員、小学校教員等、
人数：209人

期間：平成29年6月16日（金）

会場：神戸市総合教育センター

講師：北野幸子（神戸大学大学院人間発達環境学研究科准教授）

各研修項目の配置の考え方（何をどの程度配置すべきと考えたか）

- ① 第一回目の研修であり、幼保小接続教育の全体的なイメージを把握できるような内容を提示した。
- ② その上で、指針、教育・保育要領、教育要領、学習指導要領の改訂（改定）のポイントを具体的に講じた。

各研修項目の内容、実施形態（講義・演習・協議等）、時間数、使用教材、進め方等

研修項目	時間数	目的	内容、形態、使用教材、進め方等
理論に関する講義	105分	教育制度改革、カリキュラム論の観点から、このたびの	・このたびの要領・指針の改訂について、特に接続期の観点から解説した。経験主義教育と教科主義教育の違い、改訂に伴う不易と流行などについて概説した。 ・次世代育成の連携の重要性や、接続期教育の強化を図るために「資質・能力の3本の柱」「幼児期のおわ

		改訂（改定）のポイントについて理解を深める。接続期教育の充実を図るかを考察する。	りまでに育ってほしい10の姿」の共通理解を図ることの必要性について講じた。
--	--	--	---------------------------------------

実施上の留意事項

- ① 保育園・幼稚園等の保育士・教員に対しては小学校での学習指導要領とのつながりが、小学校の教員に対しては保育園・幼稚園等の軌跡がいかに関小学校教育に踏まえらるかを理解できるようにした。
- ② 10の姿の設定意図やその活用方法を説明することで、接続期教育を概念的に理解できるようにした。
- ③ 受講生の理解をうながすため、文字だけでなく写真や図表を適宜用いた。

研修の評価方法、評価結果

- ① 研修終了後に受講生全員にアンケート調査を行った。

研修実施上の課題

- ① 研修内容の性質上ある程度仕方のないことではあったが、講義中心での進行になってしまった。

2 「健康な心と体」に着目した研修

研修のねらい

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」のなかの「健康な心と体」を中心に、運動プログラムの実施を通じて幼稚園にける健康領域、表現領域の保育方法を習得する。また、遊びから発生する動きの多様性ならびに遊びから運動遊びの発達に焦点をあてた保幼小接続期教育について知識・技能を高める。

対象、人数、期間、会場、講師

対象：市立・私立幼稚園教員、市立・私立保育園教員、認定こども園教員、小学校教員など

人数：214名

期間：平成29年7月25日（火）

会場：神戸市総合教育センター

講師：米田和正、山田美紀子（みんなげんきジム、大阪芸術大学講師）

國土将平（神戸大学大学院人間発達環境学研究科教授）

各研修項目の配置の考え方（何をどの程度配置すべきと考えたか）

- ・ 実践家と理論家の 2 つの講義を組み合わせてセミナーを構成している点が特徴である。
- ・ 前半で実践家と参加者が体操や歌遊びを体験しながら研修を進行し、後半で理論家実践の背景にある研究成果や教育行政制度やについて説明を行った。

各研修項目の内容、実施形態（講義・演習・協議等）、時間数、使用教材、進め方等

研修項目	時間数	目的	内容、形態、使用教材、進め方等
実践に関する講義	45分	げんき体操と歌遊びを通じて、幼稚園にける健康領域、表現領域の保育方法を習得する。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 題目は「みんな元気体操とうた遊び～夏のプログラム編～」。 ・ 保育園の2～3才の子供たちとあそべるうたあそびと体操として、「お返事ハイ」、「ズンズンズン体操」「I LOVE ポップコーン、SOS」など。 ・ 幼稚園・保育園の3～5・6才の子供たちと遊べるうた遊びと体操として、「Jumbo!」、「おもしろヨガ美術館」、「虹のサンバ」など。 ・ 小学校低学年（1～2年）とあそべるうたあそびと体操として、「友達がいてよかった!」、「山のポルカ」「ロックトレイン」など。 ・ 演奏を含む音楽を用いて、実技形式で行った。
理論に関する講義	45分	遊びから発生する動きの多様ならびに遊びから運動遊びの発達に焦点をあてた保幼小接続期教育について知識・技能を高める。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 題目は「遊びから発生する動きの多様性から保幼小接続期教育を考える」。 ・ 学習指導要領及び幼稚園教育要領改訂の概要について、健康な心と体を中心に述べた後、運動発達の理論と多様な運動経験の蓄積の大切さ、環境によって決まる遊び経験、動きの多様性の確保の工夫、指導者に知ってほしい運動感覚、遊び・運動・スポーツへの接続について、述べた。 ・ 講義形式で行い、その途中で受講生の参加による実技も行った。 ・ パワーポイントを使用し、その内容を印刷配布した。

実施上の留意事項

- ・ 運動プログラムはいずれも、狭い空間でも体を動かせるように工夫した。
- ・ 運動経験の大切さや遊びの大切さについて、保育者が保護者にも説明可能なように、多角的な視点の講義内容を準備した。

- ・ 受講生の理解をうながすため、文字だけでなく写真や図表を適宜用いた。

研修の評価方法、評価結果

- ・ 研修終了後に受講生全員にアンケート調査を行った。
- ・ セミナーの内容や形態等の 10 観点について 4 段階で評価してもらったところ、平均 3.67 と比較的高い評価を得た。
- ・ 自由記述では、「実際に体を動かして楽しんだり、体を動かすことの大切さを知った」、「実践は、保育所で早速使ってみたい」「講話を参考にあそびを工夫し、考えていきたい。」という意見がある一方で、「もう少し、どちらも時間がほしいと思った」という意見も見られた。

研修実施上の課題

- ・ 講師間で事前打合せがなかったので、前半のプログラム内容を参考に急遽後半のプログラムの内容を修正した。事前の打ち合わせを行う必要がある。
- ・ 幼少接続期について、小学校教員側の意識が不十分である。保育園・幼稚園と小学校の双方からの意見交換の場を作る必要がある。
- ・ 214 人の受講生の大半が保育園・幼稚園の保育士・教員で、小学校教員は 10 名だけであった。小学校への広報の工夫が必要である。

3 幼小接続の原理と具体的な実践例に関する研修

研修のねらい

接続期教育の理解の深化を図り、具体的な実践事例から幼保小の連携を実際に進める方法について学ぶ。

対象、人数、期間、会場、講師

対象：市立・私立幼稚園教員、市立・私立保育園教員、認定こども園教員、小学校教員等、

人数：170 人

期間：平成 29 年 8 月 17 日（木）

会場：神戸市総合教育センター

講師：北野幸子（神戸大学大学院人間発達環境学研究科准教授）

各研修項目の配置の考え方（何をどの程度配置すべきと考えたか）

- 1 指針、教育・保育要領、教育要領、学習指導要領の改訂（改定）のポイントを踏まえた上で、幼保小接続教育の具体例を提示した。

各研修項目の内容、実施形態（講義・演習・協議等）、時間数、使用教材、進め方等

研修項目	時間数	目的	内容、形態、使用教材、進め方等
------	-----	----	-----------------

理論に関する講義	90分	接続期教育の理解の深化を図り、具体的な実践事例から幼保小の連携を実際に進める方法について学ぶ。	・接続期教育の大きな成果は子どもの不安の軽減、自尊感情や自己効力感、学びへの意欲の向上である。その前提が保幼小の垣根を越えた同僚性の形成であることを講じた。 ・小学校教育の基盤となる幼児期において、しっかりと遊びこむことが、小学校以降のしっかりとした学び込みにつながるように、資質能力の3本の柱を意識すること、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の共通認識を広げることと関連し、その具体的な方法などについて講じた。
----------	-----	---	---

実施上の留意事項

- ① 10の姿や指針・要領の改訂のポイント等第一回の研修の内容を概観することで、接続期教育に関する理論的な知見を提供した。
- ② 幼小接続教育の在り方を具体的な実践例をもとに提示した。
- ③ 経験主義教育と教科主義教育言葉の意味が異なる場合があることに注意を促した。
- ④ 受講生の理解をうながすため、文字だけでなく写真や図表を適宜用いた。

研修の評価方法、評価結果

- ① 研修終了後に受講生全員にアンケート調査を行った。
- ② 「遊びこみから学びこみへ」子供の集中力を育て、何事も楽しく自ら進んで取り組む力を伸ばして生きたいです。(幼稚園保護者・小学校教職員)、教員として、また、一父として、子供の育ちを考える上で大切なことが、より明確になったように思います。(小学校教職員)、もう一度幼児期から子育てしたくなりました。今、教師を目指して頑張っているわが子に伝えたいと思います。また、地域の一員として、子供の成長に関わっていければと思います。(中学校保護者)といった感想がえられた。
- ③ 小学校の先生が40名も参加していた。

研修実施上の課題

- ・ 研修内容の性質上ある程度仕方のないことではあったが、講義中心での進行になってしまった。

4 「思考力の芽生え」、「自然との関わり・生命尊重」に着目した研修

研修のねらい

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」のなかの「思考力の芽生え」、「自然との関わり・生命尊重」を中心に、自然との関わりを通して科学的学びの基礎について知識・理解を深める。

対象、人数、期間、会場、講師

対象：市立・私立幼稚園教員、市立・私立保育園教員、認定こども園教員、小学校教員等

人数：67人

期間：平成29年9月5日（火）

会場：神戸市総合教育センター

講師：鷲尾正則（神戸市立王子動物園）

稲垣哲成（神戸大学大学院人間発達環境学研究科教授）

各研修項目の配置の考え方（何をどの程度配置すべきと考えたか）

- ・2つの講義の組み合わせであるが、動物園学習担当者と理論家の組み合わせでセミナーを構成している点が特徴である。
- ・前半で動物園学習担当者が具体的な学習事例を提示しながら講話を行い、後半で理論家がやはり動物園のワークショップを事例にした理論的な説明を行った。

各研修項目の内容、実施形態（講義・演習・協議等）、時間数、使用教材、進め方等

研修項目	時間数	目的	内容、形態、使用教材、進め方等
実践に関する講義	45分	「思考力の芽生え」「自然との関わり・生命尊重」を中心に、自然との関わりを通して科学的学びの基礎を深める。	・題目は、「動物の見方・動物園の利用について」であった。 ・幼児期及び小学校低学年の子どもが動物園を訪問した際、彼らが観察可能な動物の生態についての解説が行われた。 ・同園が作成している動物クイズの紹介がなされた。 ・実物、PCのスライド、動画を用いた効果的なプレゼンがなされた。 ・基本的には講義形式であるが、適宜クイズを出すことで受講生の興味関心を喚起し、参加を促す工夫がなされた。
理論に関する講義	45分	「思考力の芽生え」「自然との関わり・生命尊重」を中心に、自然との関わりを通して科学的学びの基礎	・題目は、「科学的気づきの基礎を中心に接続期教育を考える」であった。 ・動物園での動物の観察に関わる学習段階とそれぞれの段階における観察の特徴について紹介するとともに、ペンギンを事例にして、動物の形態と機能を発見できる観察の要点について講義がなされた。 ・PCのスライドや動画を用いた効果的なプレゼンがなされた。 ・基本的には、講義形式であった。

		について理論的な理解を深める。	
--	--	-----------------	--

実施上の留意事項

- ・ 保育園・幼稚園等の保育士・教員に対しては小学校における動物を素材にした観察活動が、小学校の教員に対しては、保育園・幼稚園等での動物を素材にした観察活動が相互にどのように行われているかを理解できるようにした。
- ・ この時期(4・5歳から7・8歳)の子どもたちのある意味での「賢さ」を踏まえた観察活動を行うことの重要性を強調するように留意した。
- ・ 受講生の理解を促すために、実物、クイズ、図、写真等を適宜用いた。

研修の評価方法、評価結果

- ・ 終了後に受講生全員にアンケート調査を行った。セミナーの内容や形態等の10観点について4段階で評価してもらったところ、平均3.63と比較的高い評価を得た。
- ・ 自由記述では、「園から動物園が近く、よく散歩へ行くため、動物の特徴を知ることができて良かったです。今日学んだことを実践に活かしたいです」「動物園に1年生と行くので、何に注目させるか、また、深い学びをするための焦点の当て方等様々なことが分かった。また、粘土で動物を作ろうと思っているので、できるだけたくさんの特徴を見てくるよう伝えようと思いました」などの意見があり、内容的にも受講生の実態に即したものがあつたと思われる。

研修実施上の課題

- ・ 保育園・幼稚園・小学校等の垣根を越えた相互のディスカッションの場面をつくることができればよかった。
- ・ 小学校の教員が8名のみであり、小学校への広報が課題である。

5 「協働性」、「道徳性・規範意識の芽生え」、「社会生活との関わり」に着目した研修 研修のねらい

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」のなかの「協働性」、「道徳性・規範意識の芽生え」、「社会生活とのかかわり」を中心に、「話し合い活動」を通じた道徳性の育成について知識・技能を高める。

対象、人数、期間、会場、講師

対象：市立・私立幼稚園教員、市立・私立保育園教員、認定こども園教員、小学校教員

人数：79人

期間：平成29年10月16日(月)

会場：神戸市総合教育センター

講師：田中孝尚（神戸大学附属幼稚園副園長）

渡邊隆信（神戸大学大学院人間発達環境学研究科教授）

各研修項目の配置の考え方（何をどの程度配置すべきと考えたか）

- ① 2つの講義の組み合わせであるが、実践家と理論家の組み合わせでセミナーを構成している点が特徴である。
- ② 前半で実践家が具体的な実践記録を提示しながら講話を行い、後半で理論家が実践の背景にある歴史や制度について説明を行った。

各研修項目の内容、実施形態（講義・演習・協議等）、時間数、使用教材、進め方等

研修項目	時間数	目的	内容、形態、使用教材、進め方等
実践に関する講義	45分	「協働性」、「道徳性・規範意識の芽生え」、「社会生活とのかかわり」について実践的な理解を深める	・題目は「「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の観点から遊びの中の学びを捉える～「道徳性・規範意識の芽生え」、「協調性」等に焦点をあてて～」。 ・学習指導要領及び幼稚園教育要領改訂の概要を述べた後、神戸大学附属幼稚園での実践に関するエピソード記録を資料としながら、園児の会話や行動の「事実」と「解釈」を区別したうえで、教員が多面的な「解釈」することの意義と留意点を述べた。 ・基本的に講義形式であるが、適宜受講生同士で意見交換する機会を設けた。 ・PPを使用しその内容を印刷・配布した。 ・教室の壁面にエピソード記録の一部を拡大コピーして貼り出した。
理論に関する講義	45分	「協働性」、「道徳性・規範意識の芽生え」、「社会生活とのかかわり」について理論的な理解を深める。	・題目は「「特別の教科 道徳」と「道徳性・規範意識の芽生え」から接続期教育を考える」。 ・道徳教育の歴史的展開をたどりながら、平成30年度全面実施となる「特別な教科 道徳」（道徳科）の目標・内容とその特徴を論じた。続いて、道徳科の内容項目と「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の10観点を比較した。最後に、加西市立賀茂幼児園における「小さな種からうまれた絵本」活動を紹介し、そこでの道徳教育と幼小連携について具体的に検討した。 ・基本的に講義形式であるが、適宜受講生同士で意見交換する機会を設けた。 ・PPを使用しその内容を印刷・配布した。

実施上の留意事項

- ① 保育園・幼稚園等の保育士・教員に対しては小学校での道徳教育が、小学校の教員に対しては保育園・幼稚園等での道徳教育がどのように行われているのかを理解できるようにした。
- ② 「道徳性」をはじめとして、保育園・幼稚園等と小学校とでは、用いられる言葉の意味が異なる場合があることに注意を促した。
- ③ 受講生の理解をうながすため、文字だけでなく写真や図表を適宜用いた。

研修の評価方法、評価結果

- ① 研修終了後に受講生全員にアンケート調査を行った。
- ② セミナーの内容や形態等の 10 観点について 4 段階で評価してもらったところ、平均 3.57 と比較的高い評価を得た。
- ③ 自由記述では、「事例をふまえながらの説明だったので、理解しやすかった」、「幼児期から小学校へのつながりを分かりやすく教えていただいた」という意見がある一方で、「少し難しい内容でした」という意見も見られた。

研修実施上の課題

- ① 講師間で事前打合せを一度行ったが、具体的な内容にまで踏み込んで双方の関連づけを行うことができなかった。
- ② 保育園・幼稚園・小学校等の垣根を越えたディスカッションの場面をつくることができればよかった。
- ③ 79 人の受講生の大半が保育園・幼稚園の保育士・教員で、小学校教員は 7 名だけだったので、小学校への広報の工夫が必要である。

6 「数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚」に着目した研修

研修のねらい

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」のなかの「数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚」を中心に、接続期教育において数量・図形等に親しむ体験や遊びについて理解を深める。

対象、人数、期間、会場、講師

対象：市立・私立幼稚園教諭 市立・私立保育園教員、認定こども園教員、小学校教諭

人数：96 名

期間：平成 29 年 11 月 14 日（火）

会場：神戸市総合教育センター

講師：田中孝尚（神戸大学附属幼稚園副園長）

岡部恭幸（神戸大学大学院人間発達環境学研究科）

各研修項目の配置の考え方（何をどの程度配置すべきと考えたか）

- ① 2つの講義の組み合わせであるが、実践家と理論家の組み合わせでセミナーを構成している点が特徴である。
- ② 前半で実践家が具体的な実践記録や映像を提示しながら講話を行い、後半で理論家を実践の背景にある児童の発達などについて説明を行った。

各研修項目の内容、実施形態（講義・演習・協議等）、時間数、使用教材、進め方等

研修項目	時間数	目的	内容、形態、使用教材、進め方等
実践に関する講義	45分	<p>幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」のなかの「数量・図形、文字等への関心・感覚」を中心実践的な理解を深める。</p>	<p>・神戸大学附属幼稚園の田中が数量や図形、標識や文字等への関心・感覚を中心に「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の内容と活用方法について説明した。</p> <p>・同園での実践についてのエピソード記録や文科省がまとめたビデオを資料としながら、園児の遊びの姿から「事実」をみとり、それを「解釈」することの意義や留意点について検討した。</p> <p>・PPを使用しその内容を印刷・配布した。</p> <p>・教室の壁面にエピソード記録の一部を拡大コピーして貼り出した。</p>
理論に関する講義	45分	<p>算数・数学」と「数量形等への興味や感覚の芽生え」から接続期教育を考えると理解を深める。</p>	<p>・神戸大学の岡部が、近年の数理認識の研究をふまえて幼児期の遊びから小学校での教科としての算数への接続について具体的な内容とその特徴、留意すべきことなどについて論じた。</p> <p>・さらに、数・量・図形の各内容について、小学校での算数での子どもの困難性や実際の教室での学びの様相を取り上げ、その小学校での児童の姿がどのような幼児期での経験や姿からつながっていくか、数理認識の発達の連続性を視点に検討した。</p> <p>・基本的に講義形式であるが、パワーポイントを使用しその内容を印刷・配布した</p>

実施上の留意事項

- ① 保育園・幼稚園等の保育士・教員に対しては小学校での算数教育が、小学校の教員に対しては保育園・幼稚園等での数・量・形に関する保育がどのように行われているのかを理解できるようにした。
- ② 実践の映像を見ることを通して、「遊びを通しての指導」のイメージが持てるように工夫した。
- ③ 受講生の理解を促すため、プレゼンや写真などを適宜用いた。

研修の評価方法、評価結果

- ① 研修終了後に受講生全員にアンケート調査を行った。
- ② セミナーの内容や形態等の 10 観点について 4 段階で評価してもらったところ、平均 3.78 と比較的高い評価を得た。
- ③ 自由記述では、「算数・数学へのつながり、系統性の大切さを感じた。」、「内容が少し難しいように感じたが」という意見がある一方で、「内容が少し難しいように感じた」という意見も見られた。

研修実施上の課題

- ① 時間の関係もあり、保育園・幼稚園・小学校等の垣根を越えたディスカッションの場面をつくることができなかった。
- ② 96 人の受講生のうち、63 名が保育園・幼稚園の保育士・教員で、小学校教員は 22、市教委その他が 11 名と参加者が多様であったので、それぞれのよさや考えをもっといかなせるようなつくりを工夫することがのぞまれる。

7 「言葉による伝え合い」、「豊かな感性と表現」に着目した研修

研修のねらい

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」のなかの「言葉による伝え合い」、「豊かな感性と表現」を中心に、接続期教育における感性と言語活動の育成に関する知識・技能を高める。

対象、人数、期間、会場、講師

対象：市立・私立幼稚園教員、市立・私立保育園教員、認定こども園教員、小学校教員等

人数：88 人

期間：平成 29 年 12 月 13 日（水）

会場：神戸市総合教育センター

講師：山崎康子（「わかば会」主宰）

目黒強（神戸大学大学院人間発達環境学研究科准教授）

各研修項目の配置の考え方（何をどの程度配置すべきと考えたか）

- ・ 2 つの講義の組み合わせであるが、実践家と理論家の組み合わせでセミナーを構成している点が特徴である。
- ・ 前半で実践家が具体的な絵本の読み聞かせについて講話を行い、後半で理論家が実践の背景および実践を支える理論について説明を行った。

各研修項目の内容、実施形態（講義・演習・協議等）、時間数、使用教材、進め方等

研修項目	時間数	目的	内容、形態、使用教材、進め方等
------	-----	----	-----------------

実践に関する講義	45分	絵本を事例としながら、「言葉による伝え合い」および「豊かな感性と表現」について実践的な理解を深める。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 題目は「絵本の世界を子どもと共に」。 ・ 絵本の読み聞かせの実演を通して、絵本作家の意図、創作民話の物語体験、絵の役割、言語感覚の育成などの意義と留意点について、子どもの具体的な姿を交えながら説明した ・ 絵本の読み聞かせの実演を基軸としながら、児童文学作家の松野正子氏のもとで学んだことなどを交えつつ、読み聞かせに関する実践的知識について講義した。 ・ 幼稚園等での経験を尋ねるなど、受講者参加型の研修を心がけた。 ・ レジユメを配布した。 ・ 絵本の読み聞かせを実演する際、聞きやすいように、受講者に移動してもらった。
理論に関する講義	45分	絵本を事例としながら、「言葉による伝え合い」および「豊かな感性と表現」について理論的な理解を深める。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 題目は「絵本の選書から接続期教育を考える」。 ・ 幼稚園・保育所と小学校における読書環境の制度的課題を指摘した後、絵本の選書における文化的多様性の保障（障害者理解・多文化理解・性の多様性理解）と読みやすい絵本の選書基準（ピクトグラム・絵の視点・オノマトペ）について検討し、接続期における絵本の選書に関する課題を明らかにした。 ・ 受講者に対する質問を交えながら、絵本の選書に関する講義を行った。 ・ パワーポイントを使用し、その内容を印刷・配布した。 ・ 教室の壁面に紹介した絵本の書影を拡大コピーして貼り出した。

実施上の留意事項

- ① 保育所・幼稚園等の保育士・教員に対しては小学校の学校図書館が制度的に整備されている状況、小学校の教員に対しては保育園・幼稚園等の読書環境が制度的に整備されていない状況を説明することで、接続期における読書環境の制度的課題について、保育士・幼稚園教員と小学校教員との相互理解を図った。
- ② 事例を交えながら説明することで、受講者の理解を促した。
- ③ 文字資料だけでなく、図版を適宜用い、受講者の理解を促した。

研修の評価方法、評価結果

- ① 評価方法については、研修終了後に受講生全員にアンケート調査を行った。

- ① 評価結果については、セミナーの内容や形態等の 10 観点について 4 段階で評価してもらったところ、平均 3.65 と比較的高い評価を得た。
- ② 自由記述では、「絵本の大切さを改めて感じました」、「絵本の選書についてのポイントや大切なことが聞けて興味深かったです」という意見がある一方で、「もう少し選書のことを教えていただきたいかったです」という意見も見受けられた。

研修実施上の課題

- ① 講師間で事前の打ち合わせを行い、より関連付けることができればよかった。
- ② 後半は講義が中心となってしまったので、保育所・幼稚園・小学校等の垣根を越えたディスカッションの場面をつくることができればよかった。
- ③ 88 名の受講生の大半が保育所・幼稚園の保育士・教員で、小学校教員は 9 名だけであった。小学校への広報の充実が必要だろう。

連携による研修についての考察

本事業を進めるにあたり、神戸市教育委員会の総合教育センターと申請段階から協議を重ねてきた。それはセミナーの回数や内容から受講者へのアンケートの質問事項まで多岐にわたった。そうした事柄について協議するには正規の研修プログラム開発連携協議会だけでは不十分であるため、神戸大学側と総合教育センター側にそれぞれ 1 名、とりまとめを行う人物を置き、両者を中心にして大学とセンターが常に電話や E メールで意思疎通のできる体制を整えた。

セミナーの講師となる大学教員には、本事業の趣旨を丁寧に説明し、7 回のセミナーの構成を理解したうえで、自分のセミナーの内容と方法を検討してもらった。とりわけ、幼児教育を専門にしている大学教員が 1 人しかいないため、「幼児期の終わりまでに育ててほしい姿」の導入をはじめとする近年の幼児教育の改革動向について、事前に学習会等を通じて共通理解を持つことができるようにした。

セミナーの開催にあたっては、会場の提供、セミナーの広報、当日の受付、配付資料や掲示物の準備、アンケートの回収などのさまざまな面で、総合教育センターの協力を得た。そのおかげで、200 名を超えることもあったセミナーを非常に効率的に開催することができた。

今後の課題としては、セミナーの準備段階において、理論的研修担当の大学教員と実践的研修担当の現職教員等との打合せをより丁寧に行うことが挙げられる。また、国際人間科学部子ども教育学科に所属する他の教員の参画を得ることで、より多様な内容のセミナーを企画することが期待される。

受講者については、各セミナーの報告で述べられているとおり、保幼小接続期教育をテーマにしていたにもかかわらず、実際には幼稚園・保育園等の保育士が大半をしめ、小学校教員はごく少数に限られた。大学とセンターでより広報の工夫を行う必要がある。

その他

[キーワード] 保幼小連携、接続期教育、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿

[人数規模] D (67～214人)

[研修日数(回数)] C (7日)

【問い合わせ先】

国立大学法人 神戸大学
大学院 人間発達環境学研究科
〒657-8501 兵庫県神戸市灘区鶴甲 3-1
TEL 078-803-7915

神戸市教育委員会事務局
総合教育センター
〒650-0044 神戸市中央区東川崎町 1-3-2
TEL 078-386-3195